

中学校の部 最優秀賞

僕と本のパートナー

世田谷区立喜多見中学校 二年

沖山 槇之介

十五歳で作った本棚。技術の先生の机の上に置いてあった。あれが十五歳だと聞いたとき、驚くと同時に呆れた。そんなに古い本棚よりも、新しい本棚の方がいいと思ったから。でも、今は違う。「ものづくり」への考え方が大きく変わったからだ。

せつかちな僕は、小学生の頃から「とにかく早く完成させた」ということだけを考え、ものを作るとき、いつも焦っていた。中学生になっても、ものづくりではやっぱり焦っていた。そんな考えが変わったのは、一年生の三学期に受けた技術の授業がきっかけだった。木工室での実習。冬休みの宿題で、一から設計した本棚の製作実習。作業工程表の決められた作業まで進めない、居残り学習に参加しなければならなかった。放課後は、部活動がある。僕は居残り学習に参加したくなかった。ここまで順調に進んできた作業、その焦りからちょっとしたミスを引き起こしてしまった。ショックだった。と同時に、入学したときに先生が言っていたことが頭をよぎった。

「よい製品って、どういう製品のことをいうのかな。デザイン性、機能性、安全性、価格…、長く使いたいと思えるよう

なものが、自分にとっての一番よい製品なのかもしれないね。」焦りの中で、スピード重視で作った製品が本場に『よい製品』と言えるのか。確かにスピードを重視しなければならぬこともある。例えば、その製品を購入したい人が、すぐにも手に入れたいと思っているとき。世の中の経済活動の中でのものづくりでは、納期がある。でも、学校の中でのものづくりは違う。確かに提出期限はあるが、先生はいつも言っている。中学校は社会に出るための練習の場。たくさん失敗して、その失敗を活かし、いずれ成功すればいいと。ものづくりの作業を繰り返し行うことで何度も失敗するかもしれないが、慣れが出てくる。そうすれば、自然とスピードが上がる。このことに気付いた僕は、焦った気持ちのまま続けてもミスを繰り返すと思、居残り学習で気持ちを切り替えて取り組むことにした。

「丁寧に最後まで仕上げよう。その方が製品に愛着も湧き、大切に長く使いたいと思えるのは。」



中学校の部 作文朗読

翌日の居残り学習は、落ち着いて取り組むことができた。さらに、正確な作業を心掛けたことで、予定よりも作業を進めることができた。

こうして僕の「長く使いたくなる本棚」は完成した。読書好きの僕にとって、たくさんの本たちを整理できるよいパートナーを得ることができたのだ。それから、完成までの道のりも大事ということも感じた。

今までの僕は、「完成品がすべて」だと思っていた。世の中のものづくりでは、当然「完成品」が良くなければ、買手がつかない。でも、授業の中では、製作者も使用者も自分自身だ。誰かに手伝ってもらってばかりの作品では、愛着は生まれまいだろう。一方、多少、「完成品」としての見栄えが悪くとも、今の自分にできる最大限の努力で完成させた製品なら、長く、そして大事に使う気になる。だからこそ、これから「完成品」になるまでの道のりを大切にしたいと思えるようになったのだと思う。

そんなことに気付かせてくれた技術の授業を通して、「ものを作るって、何だろう?」と考えることが増えた。成功体験だけでなく、失敗からさまざまなことを学んだからだと思う。そして、自分なりに答えを導き出すことができるようになった。これをきっかけに、他の授業や生活のあらゆる場面で自分の意見を堂々と表現できるようになってきた。人前で話すことも苦ではなくなってきた。自分自身に問いかけ、答えを出すということができるようになったこと、それがこの授業で得たことかもしれない。

「ものづくり」、それは僕と本の最高のパートナーを出会わ

せてくれた貴重な体験だ。この本棚を見るたびに、さまざまなことを思い出す。僕が大人になったときに、「これは十五歳の本棚だよ。」そんな風に伝えてみたい。それを聞いた人は驚くだろう。そこから、僕がここに記したさまざまな体験についてゆっくりと語ってあげたいと思っている。

## 中学校の部 優秀賞

### 学習に対しての心構え

足立区立第六中学校 三年

齋藤 真由

私と英語との出会いは、ある一冊の本だった。それは、父が出張先から買ってきた、英語で書かれた子供用の百科事典。まだ幼かった私は、もちろん英語を読むことも意味を理解することもできなかったが、初めて見る外国の言葉や文化にどんなひきこまれていった。そして、気づけば毎日のようにその本を読むようになっていた。それから何年か経ち、中学生になった今、学校で単語や文法を習い、英語を少しずつ理解できるようになった。学びを深めていく内に、「もっとたくさんのことを知りたい」「もっと英語ができるようになりたい」と強く思うようになった。だが、この「英語ができるようになる」ということの意味を、私はまだちゃんと理解していなかった。

中学二年生の秋、家族と海外に旅行に行った。初めての外国に私はとても興奮し、意気揚々と飛行機に乗った。周りがほとんど外国人という環境なだけあり、聞こえてくる言語のほとんどが英語だった。

「お飲みものは何になりますか。」

と突然、英語でキャビンアテンダントに話しかけられた。聞かれていることも、言いたいことも頭ではわかっているはずなのに、うまく言葉にできない。私はひどく動揺してしまった。

「オレンジジュースをください。」

結局、父がかわりに答えてくれた。会話が終わり、よく考えてみたら、父の言った言葉は私にでもわかる簡単な文だった。この時、私は強く思った。「英語は使えなくてはだめなのだ」と。いくら頭でその単語や文法を理解していたとしても、それを使うことができれば、言葉としての意味をなさない。私が勘違いしていたことに気づいた瞬間だった。

旅を終え、日本に帰ってきてからの私は、英語への興味が以前よりも増していた。英語で人とコミュニケーションをとれるようになりたいと思い、単語や文法を勉強するだけではなく、英語のラジオをきいたり、父を相手に英語で簡単な日常会話をしてみた。すると少しではあるが、自分の言いたいことを英語にできるようになったのだ。「英語は習うより慣れろ」全くもってその通りだった。

中学生の多くは、私もそうであったように、英語を一つの「学問」として認識していると思うが、「学問」である以前に英語は「言語」だ。単語や文法を覚えて終わりではなく、そ

れを使って人とコミュニケーションをとるとというのが本来の目的だと思う。世界にはいろいろな国があり、さまざまな人がいる。そんな人たちと、世界共通語の英語を使って、会話をすることができたらどんなに素晴らしいか。私は英語を勉強する上で、常にこの考えを頭においている。

さまざまな国の人と話すには、もちろん基礎の単語や文法を覚えることをおろそかにするべきではない。学校での英語の授業は、英語に触れることの少ない私にとって、大切にしていかなければならない時間である。先生が教えてくれることのひとつ一つは、英語を学ぶ上で重要なポイントばかりだと思う。だからこそ聞きのがささないようにしていきたい。またそれにとどまらず、好きな英語の歌の歌詞を覚えて歌ってみたり、外国の人と話す機会があれば、恐れずに話しかけてみるなど、いろいろと実践していくことが大切だと思う。間違えたら恥ずかしいなどと考えていては、いつまでたっても英語を身近なものにはできないだろう。私にとっての英語学習とは、机の上でのせまい学びだけではなく、人との関わりの中で築き上げていく広い学びなのである。

将来は英語を使って、さまざまな国の人々と交流し、互いの文化を尊重し合えるようになりたい。「英語は習うより慣れろ」これからも実践していこうと思う。



## 「うれしさ」というやりがい

東京都立大泉高等学校附属中学校 三年

小野 真悠子

「職場体験」。これは、何のために行われるのか。答えは人によって様々であり、たくさんの理由が考えられると思う。私は「職場体験」というものは、「人が、他人のためにがんばれば、自分自身がうれしさを感じることが出来る」ということを学ぶためにあるのだと思う。

私は中学二年の夏、三日間の職場体験に行った。和菓子作りの現場に以前から興味があったので、和菓子屋さんに体験をしに行くことにした。和菓子はどのようにして作られているのか、早くこの目で見てみたくて、私の胸は期待で日に日にいっぱいになっていった。

ついに待ちに待った職場体験が始まった。朝七時三十分頃、和菓子屋さんに着いた。職人さんたちはとくに和菓子作りを始めていた。作業の邪魔にならないよう、緊張しながらもあいさつをすると、職人さんたちは笑顔で迎えてくださった。職人さんは冷蔵庫からあんこを取り出し、へらでおだんごに塗り始めた。丁寧に、なおかつ素早くあんこを塗っていく。その器用さと完成したおだんごの素晴らしさに、私はただただ感動していた。すると、

「よし、やってみよう」  
と職人さんがおっしゃった。和菓子作りを、見学するだけ

でなく体験までできると思っていた私には、とても驚いたが、もちろんうれしくもあった。やり方を教わりながら挑戦してみたが、全くうまく塗れない。いかにも簡単そうにそつなくこなす職人さんがうそのように思える。自分では、きれいに塗れたと思ってても、職人さんの塗ったおだんごとは比べものにならない。別の職人さんが、私の塗ったおだんごに手直しをしていく。おだんごは、見違えるほど美しくなっていく。

こんな光景が、おだんごだけでなく、作らせていただいたすべての和菓子で繰り返し広げられた。職人さんたちは、何年かけてこの技を習得したのだろう。いや、何十年かもしれない。職人技のすごさと厳しさを、一日目にして痛感した。

二日目もあんこを塗る作業を手伝わせていただいた。昨日苦戦したかいあってか、ずいぶんと慣れて、少し上手くなったように思えた。職人さんも褒めてくださり、私はやる気に満ちあふれた。すると職人さんは

「毎日がんばり続けることで、少しずつでも上達しているんだ。自分では分からないくらい少しでも、上達しているんだよ」とおっしゃった。

その言葉を聞いて、私は職人さんの、今までの努力について考えた。少しでも和菓子がおいしく作れるようになるために、毎日練習することで上達すると信じて、今日まで修行を続けてきたのだろう。そして今でも、こうして修行を続けているのだ。ではなぜ、職人さんは厳しく、難しい和菓子の修行を続けるのか。私は、お客様に、おいしいと喜んでもらえるからではないか、と思う。なぜなら、職人さんはいつも、

私に作り方を教えてくださる時、

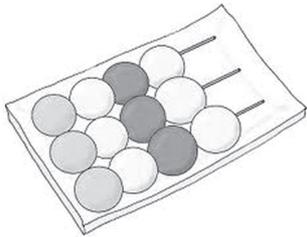
「お客様が食べる時、厚みがあった方がおいしそうに見える。」

「お客様から見える方に、模様が出るように。」

など、お客様の目線から見たアドバイスをしてくださったからだ。お客様が、と何度もおっしゃる職人さんを見てみると、「職人さんは、お客様に喜んでもらううれしさのために、和菓子作りをがんばれるんだな」と思えた。

「誰かに喜んでもらえるうれしさがあるから、仕事をがんばれる」。このことは、和菓子職人に限らず、全ての職業に共通していると思う。「仕事をする」という行為の根底にあるのは「うれしさ」である。自分が他人のために働き、相手を喜ばせる。相手が喜ぶことで自分は、「うれしさ」というやりがいを感じることが出来る。そして、自分も働く人に喜ばせてもらい、「うれしさ」を与えている。社会は、このような相互関係でできていると思った。

初日にあれほど悪戦苦闘したあんこを作る作業も、最終日には驚くほどに上達した。職人さんも喜んでくださって、私自身も、こんなにも上達した自分が信じられなかった。この日は十本ほどおだんごにあんこを塗ったが、そのうちの四本は全く手直しされずに店頭に並んだ。あの時のうれしさは、今でも忘れられない。たっ



たの三日間ではあったが、「毎日がんばり続けることで、少しでも上達できる」という職人さんの言葉を実感することができた。そして、私があんこを塗ったおだんごをお客様が買っていくところを見て、私は「うれしさ」というやりがいを一身に感じた。

私は将来、和菓子店で働くかどうかわからないが、職場体験で学んだことを生涯忘れず、社会人として実践していきたいと思う。

## 伝統芸能「能」を通じて

筑波大学附属中学校 一年

藤波重紀

職業体験という言葉が正しいかどうかかわからないけれど、僕は四歳の頃から、能舞台に出演してきました。プロの能楽師に囲まれ、観客の前で謡ったり、舞ったりし、役柄を演じてきました。その体験を通して、僕が学んだこと、そして、将来どのように生かしていきたいか書いてみました。

僕は能楽師の家に生まれ、気付いたころには、舞台に出演していました。舞台がある時、出番の二時間前には能楽堂に行きます。幼い子供が楽屋に居れば、能楽師の人たちは、僕に話しかけてくれて、楽しい時間を過ごすことができました。楽屋では、面白い冗談を言ったりして、笑わせてくれる人たちですが、ひとたび、舞台に出れば、真剣勝負です。僕も、

大人の能楽師と同様にきちんと「役柄」を演じることが求められます。

舞台に出ている時間は短い時で十分程度、長い時は一時間半近くに及ぶこともあります。時には眠くなってしまうことも、立て膝の状態で長く座る時などは、足が痛いのを必死にこらえたこともあります。のどを痛めて、かすれてしまい、謡うのがとてもつらかった経験もあります。

舞台上上がるためには、稽古をきちんとすること、そして、体調を整えることも必要不可欠です。稽古について言えば、舞台に出ている時間の何倍も長い時間の稽古を積んで、舞台上がっています。観客の皆様が僕を見る時間の何倍もの時間をこの舞台の為に稽古を重ねるのです。でも、その稽古の積み重ねがあるからこそ、本番の舞台できちんとできるのだと思います。僕に稽古をつけるのは父です。父もまた、子ども頃から舞台を経験してきました。正直、稽古をしている時の父は、とても怖いのです。その父の稽古のおかげで、舞台の本番は自信をもって臨んでいたのだと思います。父にはよく言われます。「自分にとっては、今日の舞台は数ある舞台出演の一回かもしれないけれど、観客の皆様にとっては、自分の舞台を見るのは最初で最後かもしれない。今日の一回の舞台で、自分の評価が決まるかもしれない。」毎回、全力で取り組まなければいけない。

確かに、「能」は、能楽堂の舞台、野外の舞台で行う新能にしても、観客が目の前にいて、公演するのが常です。映画やテレビドラマと違って、撮影して、編集したものを放送して見せるものではなく、いつも生放送ということになります。

毎回の舞台で、自分が最高の謡いや舞をすることが求められるのです。だから、稽古も厳しいのかもしれない。

「能」は、六百年以上も続く日本の伝統芸能ですが、これまで続いてきたのは、そうした一回一回の舞台を能楽師たちが真剣勝負で観客の目の前で演じることで、感動を与えてきたからなのだと思います。そして、将来も、人々に感動を与え、日本の伝統芸能として存続していくためにも、能楽師一人一人の毎回真剣勝負が大切なのだと思います。

全力で取り組んだ舞台が終わった後、楽屋で、父だけでなく、能楽師の人に、「よかったよ。」とほめてもらえると、ほっとしたし、「頑張って、稽古をしたか良かった。また次の舞台も頑張ろう。」と毎回、うれしく思いました。

舞台出演を通して成果をあげるために、地道な努力が必要だということ、そして、全力で取り組むこと、気持ちの切り替えが大事であることを学びました。さらに、もう一つ、舞台の為に、授業や学校行事に遅刻したり、早退することもあり、自分なりに納得するのに苦労することもありました。自分の思い通りにならないこともあり、我慢し乗り越えることの必要性も学びました。

僕が将来、どの道に進むかわかりませんが能舞台出演を通して、ひと足早く、社会を知る機会を得ることが出来たことで、よい人生経験になりました。

僕が学んだ経験は、今の学校生活を送るうえでもあてはまることで



すが、それらをきちんと実践し続けていくことは、時には難しかったりします。しかし学んだことを心にとめて行動できれば、これからの人生をよりよく過ごせるはずと思います。

高等学校の部 最優秀賞

一頭の子豚から教わったこと

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

山崎 明日香

家畜というのは人の生活に役立てられる為に飼われ、それ以上の存在にはなれません。中にはその事実を受け入れられない人もいますが、私も幼い頃はそう思っていました。あの頃は生き物の命を奪って食べるということが理解できず、ただ単純に「可哀想」と思っていただけなのだと思います。

私は畜産科学科で、家畜というものを一番深く学ぶために養豚類型を専攻しました。そこで、一頭の子豚と出会ったのです。その子豚は大ヨークシャー種の雄の子豚で、兄弟たちとの群れ飼育をしていた時に、左後ろ脚を怪我してしまい、これ以上一緒に飼育を続けると群れでは餌が食べられず衰弱死してしまう、という理由で隔離飼育をすることにしました。痛々しく腫れあがる脚を庇いながら歩く姿を、今でも覚えています。

その頃の子豚は、既に死んでしまったような目をしていました。全てを諦めているような、そのような目でした。私は、この子豚はこのまま死んでしまうのかもしれない、と思います。それと同時に一つの疑問が浮かんできたのです。この子豚の生まれてきた意味は何なのだろう、と。子豚は人間の

手によって肉になるために生まれてきますが、家畜として生きられずに死んでしまうのはあまりに無意味な死ではないかと、とても悲しい気持ちになりました。私はどうしてもこの子豚が生まれてきた意味を無駄にしたくなくて、どうにかしてでも肉豚としての一生を送らせてやりたいと考えたのです。それからの私はこの子豚の脚が良くなるよう、毎日管理に取り組みました。薬を塗ったり、寝床をきれいにしたりの日々が続く、次第に私のことを認識してくれるようにもなってきましたが、脚の怪我はあまり良くはなりませんでした。

そんなある日、先生からもう飼育をやめて淘汰したらどうかとの提案がありました。子豚をこれ以上、痛みに耐えさせ続けて生かすのは可哀想だ、という理由からです。養豚農家ならばきつともっと早い段階で淘汰していると思



高等学校の部 最優秀賞の山崎明日香さん

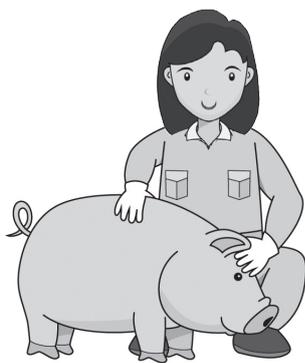
ます。ですから、もう淘汰して苦しみから解放してあげた方が良いのかもしれない、そう思うこともありました。でも、そうしてしまったらこの子豚の生まれてきた意味は何なのかと。自分でもどちらが良い方法なのか分からなくなり、悩んでしまっ日々が続いていました。

それから一か月程経ったある日、子豚が死んでしまいました。脚の怪我が元での衰弱死でした。その時の私の感情は「可哀想」ではありませんでした。子豚の死によって、私の考えに一つの結論を導き出すことができました。家畜として生まれさせたからには、家畜として利用し尽くすところが、命を提供してくれる家畜や、食卓に並ぶまでの過程に携わる沢山の人々に対して感謝を表せることなのだと思います。

この経験により、私には新しい目標ができました。それは豚の飼育と解体、ハムやソーセージへの加工、またそれらを食べるのできるレストランが一緒になった、総合的な養豚牧場を経営したいという目標です。このことにより、命が肉になって食べておいしく無駄なく加工することが人々に広く伝わりやすいと考えるからです。肉をスーパーで購入する時、生きている豚を思い浮かべる人はあまりいないと思います。でも私の考える養豚牧場では、生きている豚とお肉とが身近に存在しているので、これなら家畜への感謝の気持ちや、消費者の方が自然と感じることができると思います。私の目標とする養豚牧場では加工して販売するので、豚の部位も利用します。血液や皮、爪や毛、内蔵も骨もです。今でもこれらのものは利用されていますが私の考える理想は食べることに使う利用です。食べることにこそ、命をいただいた家畜へ

の感謝を一番表せると思うからです。皆さんはそうは思いませんか？

ですから私は、養豚の技術的な勉強と食肉加工や食品製造の分野も学べる大学や、その後専門学校にも進み、技術を身に付けたいと考えています。また、小さい子供たちに養豚体験を気軽に経験してもらえような、養豚学校を開きたいとも考えています。肉を食べるということは、動物の死があることを小さい頃から体験的に知ってもらうことによって無駄なく食べる感謝の気持ちが身に付くと考えるからです。私のこの目標を実現させるには、長い年月と資金が必要となりますが、同じ志を持った仲間が、全国にはいると思います。私はその人たちと連携や協力をすることによって、農業法人の設立や、既にある養豚経営の共同経営など、夢を諦めないかぎり色々な方法があると思います。理想とする養豚経営を通して、人が生きるということは命をいただいているということ。たくさん命をもらった自分の命を大切にしたい、周りの人の命も大切にしていきたいです。



高等学校の部 優秀賞

挑 戦

東京都立葛飾商業高等学校 三年

高 橋 裕 貴

私は商業高校に入学して、初めて本格的に商業科目という未知の分野の学習を履修し、学び得たことが多くあります。

私の在籍している高校では、多数の資格を取得することができ、情報処理科では、全国商業高等学校協会主催の情報処理検定やワープロ実務検定の一級取得を目標とした授業のカリキュラムが組まれていきます。一級を取得するためには、もちろん毎日のように補習があり、出来ないところはできるまで徹底して先生が指導して下さり、私は情報処理検定・ワープロ実務検定共に一級を取得することができました。中学校で学習してきた普通科目と違い、「資格」という形に残るもので成果が見えるというのとはとても嬉しかったです。特に、ワープロ実務が学校内での大会でも優勝し、先生からの薦めでワープロの速度の東京都大会に出場させていただきました。周りには今まで見たことないくらい入力スピードが速い人がいて、とてもよい経験となりました。商業科目を学び、作業の正確さやスピードも上がり、社会に出ても活かすことができるスキルを身につけられたように思います。

多数の検定試験を取得した中、現状の自分に満足せず、さらに上の資格を修得したいという意欲がわいてきました。

別の商業高校に通学している双子の兄が簿記の学習をしているのを見て、一年生の頃からとても興味深く、自分もこの検定を修得したいと思っていました。私の在籍している情報処理科は、商業科目の中でも前述した情報処理の授業やワープロの授業を主に履修していて、商業科やほかの商業高校に比べると簿記の授業はあまり行っていませんでした。

2年生の時に初めて簿記に触れ、経理処理や税務関係など、本当に初めての語句のオンパレードで、なんだかわくわくしました。この頃から、将来は税務関係の仕事に就きたいと思い始めました。ならば、上を目指し挑戦しようと、授業では全国商業高等学校協会主催の簿記検定3級のカリキュラムでしたが、私は先生に全商1級を取得している兄や、先生の協力をいただき、全国経理教育協会主催簿記検定に挑戦し、最終的には「日本商工会議所主催簿記検定2級」の合格を目標としました。全経の2級は簿記が好きだったので、苦もなく取得することができました。しかし、日商検定は本当に難しく、自分には無理だと感じあきらめようとも思いましたが、目標を立てた以上は努力するしかありません。

私は部活動は硬式野球部に所属していて、早朝練習、放課後練習、夜は自主練習、土日は練習試合・遠征試合と、とても厳しい活動内容で、自宅学習の時間を確保するのが困難でした。しかし、学校の休み時間や、自習の時間、時間が作れるときには常に簿記の勉強をしていました。部活動が終わり、どんなに疲れていても寝る前のたとえ数分間でも参考書を開き、必ず毎日学習するという計画を立てて、実行しました。学生時代の今までで一番勉強したのではないかと、思うほど

です。その成果は、結果となって表れました。周りからは合格は厳しいといわれていた「日商簿記検定2級」を見事取得することができたのです。今考えると、学習する時間が人より少ない分、その少ない学習時間に集中することができ、独学に近い状態であっても合格することができたのかもしれない。もちろん、背中を押してくださった先生、自分自身も受験するのに教えてくれた兄、周りの方々の協力や家族の支えがあったからこそ、挑戦する勇気がわき、努力できる自分がいたのだと思います。

専門教科はもうこれで終了、というものではないと思います。社会に出てからも、学ぶこと、さらに上の資格へと挑戦し続けることができます。私はわからないことはわからないままにせず、学ぶことを継続し、専門教科で学び得た多くのことをこれからの人生にも必ず役に立てていきたいと思っています。

## 地域のためにできること

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

尾山 駿

私は、瑞穂農芸高等学校食品科で食品に関する専門的な知識を学んでいます。それまでは、食品に対して、興味はほとんどありませんでした。とりあえず、高校に入ればいいやと思っていただけでした。

入学してみると、食品製造実習など、本物の材料を使用し、実際に食品を加工して、様々な製品を作ることを経験しました。すると、今まで気にもしていなかった食品の製造工程や原理などを学習することで、多くの興味がわいてきました。家でも、授業で習った製品を、家族のために作ってみました。そこには新しい発見がありました。そして、以前よりも食品製造に対して、興味が強くもつようになりました。自分の「食」に対する考え方が大きく変化しました。

現在、私は、食品について研究する部活動、「食品研究部」に所属しています。活動内容としては、食品を通して地域と密接に関わり、地域（瑞穂町）の活性化を目指すプロジェクト活動を主に行っています。

私の通う瑞穂農芸高校がある瑞穂町は、東京の西部、狭山丘陵の西端にあります。東京都とは思えないほど自然に恵まれた場所です。人口は三万人ほどの小さな町で、かつては賑やかだった商店街などは、だんだん寂れてきている状態です。

そこで、まず、地域の方々と密接に交流するために、学校の生産品であるクッキーを製造し、販売する試みを行いました。さまざまな地域の行事で販売活動を行うことで、人との関わりが苦手だった私も、少しずつ打ち解けられるようになってきました。さらに、新たな地域のイベントにも、積極的に参加していきました。

そして、私たちは瑞穂町の方々とさらに深く交流していきたいと考え、瑞穂町の特産品を作ることに挑戦しました。瑞穂町では都心部に近いことから、様々な種類の野菜を生産しています。その中で、最近、トマトの生産量が増加しています。

トマトの生産農家の方に伺うと、なるべく赤く熟すまで収穫を待ち、おいしいトマトを出荷しているそうです。しかし、最盛期の夏場は、割れてしまったり、形のよくない規格外のトマトなどがあり、出荷できないトマトは二割ほどになるということでした。

そこで私たちは、これらの出荷できないトマトを利用した製品を作ることになりました。トマトは栄養価も高く、せっかく作ったトマトを無駄にしないように、丸ごと利用すること、さらに誰もが食べられるような製品にしようと思いました。その代表作がトマトパンです。

トマトパンは、水を一切添加せず、トマトの水分だけで作ります。試行錯誤を重ねながら、改良していくことはとても大変でしたが、仲間と協力しながら、目標に向かって進めていくのは楽しい時間でした。

トマトにはスパイスが合うという意見があり、コショウやバジルを添加してみたり、ピザのようにチーズやサラミなどを包んで作ったりしました。その結果、トマト嫌いな人でも食べられるおいしいおかずパンとなりました。

また、新たな試みとして、実際に食品研究部で学校の畑の一部を借り、トマトの栽培を始めました。自分たちでトマトの育て方を調べながら、土作りから行いました。

わずかな面積の畑ですが、夏場の草取りなどは、これでもかと成長する雑草に驚きました。同時に、雑草の生命力に感動もしました。

トマト栽培を初めから試みることで、農家の方々の苦労を本当の意味でわかった気がしました。十分に世話ができたと

はおもいませんでしたが、約十キログラムのトマトを収穫することができました。

私は、このような活動を通して、初めて、「使命感」や「やりがい」を感じました。そして、少し苦手だった人とのコミュニケーションなど、自分の能力の向上にも繋がられたと思います。

「食」を通して、身の回りの人々との絆、やりがい、食べ物を作ることを大変さや喜び、そして、「食」そのものの大切さを知ることができました。

今後も、瑞穂農芸高校で学習したことを生かして、地域のために、今、私ができることをがんばっていききたいと思っています。

## 「無知」を知る課題別学習の重要性

東京大学教育学部附属中等教育学校 四年

黒木 縫

あなたは、困っている人に「物をあげる」というシンプルな行為が、時に問題となることを想像出来るだろうか。被災者の方々を励まそうと被災地を訪れる人によって不公平な思いをしたり、心の負担を背負う人がいることを知っているだろうか。過去の私は恥ずかしながら、これらのことが何も分かっていたいなかった。何も知らないまま東北支援をしようと考えていたのだ。無知な私の、その甘い考えを変えるきっかけ

となったのは、課題別学習という授業だった。

課題別学習とは、一〇以上の様々な講座の中から自分が興味を持つテーマの講座を選択し一年間をかけて学んでいく、中学三年生と高校一年生が一緒に受ける週二時間の授業である。私は今年「NGO入門」という講座を選び、受講している。NGOは非政府組織のことだが、初めて聞く人にとっては何のことだか分からない。分からなかった私は、初回の授業からしばらくの間は、NGOとは何かという基本的なことから、新たに自分の常識に登録することに専念した。そして六月末によく、課題別学習として、子どもとともに途上国の地域開発を進める国際NGOである「プラン・ジャパン」という団体を訪問出来ることになった。そこでは、職員の方から東日本大震災に対しての「プラン・ジャパン」の活動内容と、驚くべき震災の現実についての話を聞いた。それがこの作文を書くきっかけとなったのである。

プラン・ジャパンが東日本大震災のために行った活動の一つとして、緊急支援物資の支給がある。そのNGOが取り扱う物資とは、例えば文房具や食料などであった。支援物資と言えば、被災した方々にとって、生きていくために必要な物というイメージを多くの人が持っているはずで、私もそのうちの一人であった。だから、物がなくなったり被災地を助ける気持ちで、とにかく早く、たくさん物資を送るべきであると思っていた。しかし、「物をあげる」というシンプルな行為は、多くの問題があったという。どういうことなのか。例えば文房具。それは、避難場所となる東北の学校に、子どもたちの為にと全国から文房具が送られ、被災者の方々が喜び、

私たちが感謝される、という話だと思いやすい。しかし、実際に、文房具が大量に集まり過ぎ、学校の一部屋を埋め尽くす事態となったという話だった。この問題から、プラン・ジャパンでは、被災地のどこに何を分配するかの話し合いを繰り返したという。私は、物がない被災地では、どんなものでも必要としていると思ひ込んでいたため、この話には驚いたのだった。

自分の思い込みを知らされたことは、まだあった。被災地で起こるイベント。被災地に有名アーティストが音楽と元気を届けたというニュースを見たことがあるだろう。私はそれを見て、大勢の有名人にその場で歌を歌ってもらえて嬉しいだろう、被災者の方々の心の支えになることだろうと思っていた。しかし、この話題には裏に多くの問題があったのだ。それは、一部メディアがある地域を取り上げると、他のメディアや寄付などがその地域に集中してしまうということだ。その結果、地域によって寄付金や物資量に偏りが出てしまうのだ。そのことについて私は気付くこと、考えることすら出来ていなかったのである。

また、被災者の方々の心の整理がつかない中で、多くの人々が被災地に訪れてしまうと、逆に大きな心の負担になることがあるとも教わった。私はもう一度、有名アーティストが被災地で歌を歌ったというニュースを思い出してみた。歌のおかげで元気が出たと笑顔で答える現地の人がとても印象的だった。だが、もしかしたら心はまだ泣いていたのかも知れない。テレビの情報を鵜呑みにしていた自分は愚かであったと反省してしまう。



専修学校の部 優秀賞

## 私のインターンシップ

ホスピタリティリズム専門学校 二年

長谷川 静 郁

私が専門学校一年生の時のインターンシップで学んだこと、得たことは大きく三つあります。

まず、一つ目は何と言っても「責任の重さ」です。私の研修内容はホテル屋外にあるガーデンプールのエントランスでの受付、会計、電話対応が主な業務でした。そして、研修生とは言えそのホテルの従業員の一人としてゲストから見られてしまうのは当然の事です。ですから、自分自身の発言や態度、一つ一つに責任を持たなければなりませんでした。例えば、「この辺りで水着を売っている場所は？」や「日傘を売っている場所は？」と様々な質問をしてこられるゲストがたくさんいました。最初はとまどってしまうこともたくさんありました。マニュアル通りのあたり障りのない接客が出来ればいいと思ってしまうこともありましたが、日にちが経つにつれて、「ホテルの従業員として恥ずかしくない接客をしたい。」という意識に変わっていききました。意識が変わってからは、ホテル内にどういう施設があり、営業時間は何時から何時までなのかを調べたりしました。ホテルの外も近くのショッピングセンターではどういうものを売っているのかを散策してみたりと、実際に自分の目で見て知識をつけまし

た。また、電話対応では特に「責任」というものを実感しました。電話ではフォローしていただける社員の方もいないですし、電話を応対している私の印象はホテルの印象になってしまいます。そのため、正しい丁寧な言葉遣いで対応するのにとっても苦労しました。仕事をするうえでの責任を一番身を持って学びました。

二つ目に学んだ事は「常識や考えは人それぞれ違う」ということです。前で述べたように私は電話対応を任されています。電話ではホテルへ足を運ぶ前のゲストからの様々な問い合わせがありました。例えば「プールの混雑状況は？」「午後から天気が悪くなるみたいだけど営業はどうなの？」という答えにくい質問をされる方も多数いらっしゃいました。人によって混雑と感じる感覚はかなり違います。私から見ているかと思ってもゲストは混んでいると感じる方もいらっしゃると思います。研修を始めてからすぐは「比較的空いております。」や「本日は大変混み合っております。」など抽象的な言葉、表現を使って回答していました。しかし、この回答では初めて来るゲストは想像もつかないでしょう。そこで私は上司の電話対応をよく聞くことにしました。上司は混雑状況を「数字」を使って表現していました。例えば「今日は九時頃から多くのゲストで混み合っています。しかし、午後三時頃以降は空くと思います。」「ベッドチェアは全て埋まってしまっておりますが、テーブル席でしたら5台ほど空いております。」などより具体的に状況を話していました。この時に、人の考えや常識は違うのだから、具体的な数字を使うことでほとんどのゲストと同じ感覚を持つことができま

した。固定概念を捨て柔軟に対応しなければならぬと感じました。自分の常識、考え、固定概念にとらわれていては個々のゲストに満足していただけるサービスはできないと考えさせられました。その為にはもっとより多くの知識をつけ、自分の視野を広げていく事が大切だという事を学びました。

最後に三つ目は「積極性」を得ることができました。プールの更衣室では男女が離れてしまいうえ、携帯の電波が届かない為ゲストが困っている様子の場面に多く遭遇しました。研修開始後一週間程はゲストから話し掛けられるまで待つていました。しかし、ゲストが困っていると感じたのなら素早く考え、行動しなければ私は研修で何も成長できなぬと感じました。ゲストの小さな行動、目線、会話を見逃さない、聞き逃さないように常に回りを見ながら仕事をするようにしました。そうすることで「困っていたの、ありがとう。」「気づいてくれてありがとう。」というお言葉をゲストから頂くことが出来ました。このように感謝されると私もその後の仕事を気持ち良く行うことが出来ました。このエントランスでの業務全てで積極性を得ることが出来ました。

以上の三つを短かった一ヶ月半のインターンシップで学び得ました。この三つは私が来年の四月から始まる仕事の間でも必ず活かすことが可能です。初心を忘れずにこのインターンシップでの事を思い出し、これからの社会人生活に役立たいと思います。

### 中学校の部 佳作

No.	学 校 名	入選者氏名	作文題名
1	愛国中学校	加藤 瞳依	将来の夢
2	千代田区立神田一橋中学校	實松 虎太郎	ふれあい
3	中央区立晴海中学校	光武 晴香	あのとき、あの場所で仕事をして
4	中央区立晴海中学校	神谷 咲	とっておきの夢
5	港区立朝日中学校	岡下 湖都音	和紙のうちわ作りを体験して
6	文京区立第六中学校	高木 りさ	集団教育の大切さ
7	墨田区立両国中学校	佐藤 ちひろ	将来の夢
8	江東区立有明中学校	半谷 雅	ものづくりの楽しさ
9	江東区立有明中学校	鳥山 翔平	ものづくりの喜び
10	品川区立日野中学校	光島 舞	私の夢
11	品川区立日野中学校	並木 瑠璃	未来
12	目黒区立第八中学校	立堀 華奈子	私の将来の夢
13	目黒区立第十中学校	小野 眞嵩	夢に向かって
14	大田区立羽田中学校	小林 真穂	一つの繋がりの中で
15	中野区立中野中学校	川本 りな	夢の実現に向けて
16	足立区立第六中学校	荒木 菜々実	技術・家庭科分野
17	足立区立第七中学校	鈴木 詩織	誰かのためを思って
18	足立区立第十二中学校	奥山 翔太郎	作ることの喜び、ものづくりの喜び
19	調布市立第四中学校	黒川 由衣	生きがいとなるもの

### 高校・専修の部 佳作

No.	学 校 名	入選者氏名	作文題名
1	都立忍岡高等学校	山田 笑美	笑顔の魔女になりたい
2	都立忍岡高等学校	齋藤 早代子	きゅうりからの成長
3	都立忍岡高等学校	高橋 八千代	夢と目標
4	都立橘高等学校	高橋 桜香	ボランティアの楽しさ
5	都立農業高等学校	五十嵐 明日香	おもてなしの心
6	都立農業高等学校	高佐 侑矢	私の夢
7	都立農業高等学校	手塚 明利	実習を通して学んだこと
8	都立農産高等学校	松永 文音	植物と共に生きるということ
9	都立農産高等学校	柳谷 采佳	笑顔のきっかけ
10	都立野津田高等学校	大場 若穂	今の私に出来る事
11	国際理容美容専門学校	湯川 晃慎	学習を通して得たこと
12	中央工学校	水須 麻里絵	私の成長期
13	ホスピタリティツーリズム専門学校	中井 晴美	ホテルを知った私